

日本ラグビーとプロ化の是非

－アマチュアリズムの変容－

本武 育真（筑波大学）

1. 目的

海外ラグビーや、日本におけるスポーツがプロ化していく流れの中、ラグビーは完全プロ化に踏み切らず、アマチュア選手とプロ選手が混在している状況に興味を抱いた。本研究では現在の日本ラグビーの状況について分析し、日本ラグビーの未来のために完全プロ化すべきかアマチュアリズムを保持すべきかを明らかにする。

2. 方法

まず、ラグビーとアマチュアリズムが強く結びついた経緯となぜアマチュア規定の撤廃に至ったかを明らかにする。

次に、Jリーグについて研究し、プロ化によってスポーツがどのように変化するかを考察する。

最後に、日本ラグビーにおいてアマチュア規定撤廃に至った経緯を調べ、イングランドにおけるアマチュアリズムとの違いを考察する。また、ラグビートップリーグとJリーグを比較し、選手の視点からそれぞれの状況について論じ、プロ化すべきかについて明らかにする。

3. 結果と考察

1) ラグビーとアマチュアリズムの関係について、ラグビーの起源であるイングランドでは第一次アマチュアリズム、日本ラグビーにおいては第二次アマチュアリズムといった二つに分類できることが分かった。

第一次アマチュアリズムは、「特権階級のためのアマチュアリズム」とも呼ばれ、実際には富裕階級が作った下層階級との「差別基準」のことであり、第二次アマチュアリズムは、「民主化したアマチュアリズム」とも呼ばれ、純粋にスポーツを愛好する考え方で、スポーツ哲学として定着したものである。

2) 日本サッカーの歴史を分析した結果、Jリーグの誕生によって人気は高まったが選手自身のキャリアという視点から見ると、全員がプロ選手という形

であるためセカンドキャリアが安定しておらず、将来に不安を持っている選手が調査対象の選手の76パーセントに上る状況であることが分かった。

3) 日本ラグビーでは、アマチュアリズムを堅持しすぎた結果、観客数の低下を招くなどの失敗があったが、完全プロ化という道ではなくアマチュアの社員選手が基本で、プロ契約の選手も認めるというオープン化によって、ラグビーで培った能力を社業に活かす環境があり、プロ選手も自身で決断することからセカンドキャリアについて考える機会になるなど日本ラグビーにしかない特徴があると考えられる。

4. 結論

イングランドと日本におけるアマチュアリズムとの違いから、IRBと日本協会が撤廃したアマチュア規定にも違いがあることから、日本ラグビーがイングランドやその他の第一次アマチュアリズムに基づくアマチュア規定を撤廃したユニオンのように、完全プロ化に踏み切って成功するわけではない。

また、プロリーグであるJリーグとプロアマが入り混じるトップリーグを比較して、日本ラグビーにはセカンドキャリアについて考える機会と自身の能力を活かすことができる環境がある、という違いがあった。

この二つの理由から、日本ラグビーは完全プロ化に踏み切るのではなく、プロ選手も社員選手も認めるという形を守るべきである。

しかし、観戦者の立場に立った場合トップリーグがJリーグに見習う点は大いにあるということも明らかになった。また、日本においてアマチュアリズムということばの意味にも変容が見られ、どのように変化したかを知ることは、今後の日本ラグビーの在り方を決めるうえで今後の課題である。

5. 主な参考文献

清川正二，オリンピックとアマチュアリズム，ベースボールマガジン社，1986.